

现代汉语 基本助动词 语义研究

〔日本〕鲁晓琨 著

XIANDAI HANYU
JIBEN ZHUDONGCI
YUYI YANJIU

中国社会科学出版社

现代汉语 基本助动词 语义研究

[日本] 鲁晓琨 著

XIANDAI HANYU
JIBEN ZHUDONGCI
YUYI YANJIU
藏书



20029254

中国社会科学出版社

序

魯曉琨氏は精進の人である。その旺盛なエネルギーのほとんども仕事を仕事と学術研究に注いでいる。

氏は1982年1月 中国吉林大学中文学科を卒業、1990年まで、中国のハルビン師範大学において助手、講師として勤め、1985年9月在職のまま、中国語学専攻の修士課程に入学、1988年6月文学修士学位を取得している。この間、中国語文法や中国語と日本語の対照研究を行っており、すでに中国の学術誌で何編かの論文を掲載されている。

1990年来日、1991年度にはお茶の水女子大学において1年間という短い期間ではあったが大学院研究生として私の元に籍をおいた。その翌年から東京の成蹊大学、明治大学などの非常勤講師を勤めている。そして1996年度から文京学院大学の専任講師となった。日本において大学の専任教員となるのは容易なことではない。氏のすみやかなる講師就任は、その学問と人柄の卓越を物語るものであろう。

専任として安定した研究生活ができるようになり、助教授に升進してからも、彼女は私の元へ通い続けた。日本の教員というのは大変忙しい。にもかかわらず爾来十年以上にわたり、私の大学院の授業や私的な研究会である244会に積極的に参加し続けた。氏の研究意欲はおとろえを知らぬかのようである。

日本で教学に従事して以来、魯さんは毎年のように実際の教学の場で遭遇した問題をテーマにして論文を発表し続けた。中国での国際的なシンポジウムに出席したり、日本中国語学会へ投稿したり、また自分の大学の紀要に発表したりと、発表の場はさまざまであったが、その題材はほとんどが現代中国語の語法と意味の弁別問題であった。それらに共通することは「中国語教育の現場で学習者が理解に困難を覚える」ようなテーマだった。

彼女がこれまで取り上げ、研究してきた数多くの課題のうち、そこにはおのずとある中心テーマが現れてきた。助動詞である。助動詞を扱った論文はしだいに体系をなすようになってきた。やがて研究が一つの方向に収斂し、これまで発表した数編の論文を基礎とし、これに体系性をあたえ博士論文の完成となった。今、氏の《現代汉语基本助動詞的語義研究》（「現代中国語における基本的な助動詞の語義研究」）を手にし感慨にたえない。本書は2002年お茶の水女子大学において人文科学論文博士学位を取得したものである。

中国語助動詞は難問が多い。とくに日本人の中国語学習者は、初級の段階で助動詞の使い分けに悩む。例えば可能を表す“能”と“可以”の違い，“能”と“会”の使い分け、蓋然性を表す“会”と“要”も難しい。願望を表す助動詞では“想”と“要”の違い，“想”と“愿意”の使い分け、さらには“愿意”と“肯”のニュアンスの違いもある。当為・必要類ではいくつかの“应该類”内部の微妙な違いがあるし，“应该”と“得”と“要”の区別も必要だ。さらには助動詞に特有の否定形の問題もある。

これらの重要な問題のほとんどが入門、初級期である大

学一、二年の時に出てくるのである。真摯な教師であれば誰でも悩む問題である。魯曉琨氏は実際悩んだのである。そして、上に挙げたような一つ一つの問題を自分で解決すべく取り組んだのである。日本での日々の教学の実践がなければこのような困難な課題に、かくも熱心に取り組むことはなかったであろう。

本論の研究方法としては、「機能言語学」「談話言語学」「認知言語学」の理論を用い、まずそれぞれの助動詞の基本義を考察した。この考察の上に、基本助動詞間の意味的差異の語義分析を行った。さらに語義上解決できないような問題については語用論的、認知論的な解釈を試みている。

この研究のもう一つの特徴は個々の助動詞研究というミクロな段階にとどまらず、個別研究の基礎の上に、現代中国語の基本助動詞の可能類系列、愿望類系列、必要類系列などをマクロ的に提示し、そこにひそむ漢民族の認知的心理特徴を見出した点である。さらには助動詞の主観性に関わる問題として、特に基本助動詞の「認識的モダリティ (epistemic modality)」の表出系列についての論述にも見るべき点が多い。

本研究が備えているもうひとつの特徴はその視点がミクロであれマクロであれ、常に教学の場においてどう教えるかを意識していることである。出発が“课堂”にあるものは“课堂”への恩返しを忘れてはいない。本書は理論のみの書ではなく、中国語教育に資するところ大であると確信する。

現在では博士号を取得するのは珍しい現象ではなくなっている。しかし、個人においてこの営為はなお長期にわたる、困難の多い作業である。なかんずく、お茶の水女子大学においては本博士論文は中国語学において私が審査した最初の論文にな

った。魯曉琨氏の精進を是とし、今後の活躍を期待し、もって序となす。

相原茂

2003 年 11 月

序

鲁晓琨非常勤奋，她旺盛的精力几乎都倾注在汉语教学和研究上了。

鲁晓琨 1982 年毕业于吉林大学中文系，1990 年在哈尔滨师范大学任助教、讲师，并在职完成了现代汉语专业硕士课程，于 1988 年获文学硕士学位。这一时期她开始进行现代汉语语法和汉日语言对比研究，在中国的学术杂志上发表过数篇论文。

鲁晓琨于 1990 年来日本，1991 年在御茶之水女子大学研究生院只作了一年我的研修生后，就开始在东京的成蹊大学、明治大学等作非常勤讲师，1996 年到文京学院大学（原文京好大学——译者加）作专任讲师。在日本能当上大学的专任教员并不是一件容易的事，她能很快地成为专任讲师也证明了其学问和人品的出色。

当上专任讲师，以及晋升为副教授后，虽然自己有了安定的工作研究环境，她仍然积极参加我的研究活动。日本的教员是非常繁忙的，尽管如此，她十多年来一直参加研究生院的学习和我主持的“244 会”（每个月第二和第四个星期的星期四 17:00—19:00 在御茶之水女子大学举行的汉语研究会，现在实际上改在每个月第二和第四个星期的星期五 17:00—19:00 举行——译者加）。她的研究热情始终没有减退。

在日本从事教学工作以来，鲁晓琨每年都以在教学上遇到的问题为研究题目发表论文。她参加在中国等地召开的国际学术研

讨会,给日本中国语学会会刊投稿,也在自己所在大学的研究纪要等处发表论文,其研究内容主要集中在对现代汉语近义语法现象和词汇的辨析上,以此来解决汉语教学上的难点。

在她研究过的多个题目中,自然而然地一个主要题目表现出来:那就是现代汉语助动词,研究助动词的论文渐渐成为一个系列。不久她把研究集中在这一主题上,在本人已发表的数篇论文的基础上完成了博士论文。现在,手持《现代汉语基本助动词语义研究》这本书不胜感慨,因为鲁晓琨以本研究于2002年度在御茶之水女子大学获得了人文科学论文博士学位。

汉语助动词难题很多。尤其是日本的汉语学习者在初级阶段就为助动词的辨析而苦恼。例如,表示可能的“能”和“可以”、“能”和“会”、表示主观推测的“会”和“要”的同异,表示愿望的“想”和“要”、“想”和“愿意”、“愿意”和“肯”的纠葛,在必要类助动词中,几个属于“应该类”的助动词的微妙区别,“应该”、“得”、“要”的区别都有必要进行辨析。另外助动词还有一个肯否不对称的问题。

这些助动词多数在入门和初级阶段即大学一、二年级就已出现,这些助动词的辨析都是作为一个真诚的教师会感到困惑的问题。鲁晓琨体验了这种烦恼后,自己开始一个一个地解决上述问题。如果没有在日本每天的教学实践就不会热心研究这种困难的课题。

本研究运用功能语言学理论,话语语言学理论,认知语言学理论,首先探讨了每个助动词的基本语义,在此基础上分别从基本语义,特别是从语义对比特征上对基本助动词进行语义辨析,还从语用、认知上解决了语义上回答不了的问题。

本研究并没有只停留在微观阶段,而是在微观研究的基础上揭示出现代汉语基本助动词的可能表达系统、意愿表达系统、必

要表达系统，从而发现了存在于背后的汉民族的认知心理。此外，本研究对助动词的主观性问题，特别是对基本助动词“认识情态 (epistmic modality)”表达系统的探讨也较有新意。

本研究不论是微观探讨还是宏观概括都有意识地为教学服务，没有忘记把以“课堂”为出发点的研究再返还给“课堂”。我相信这本书不仅在理论上，尤其是在汉语教学上会有很大的参考价值。

现在获得博士学位已不稀奇了，但是对一个人来说，这仍然是一项路程漫长、需要付出极大耐力和心血的劳动。而且这篇论文是我主审的御茶之水女子大学汉语专业的第一篇博士论文。为肯定鲁晓琨的勤奋精神，期待她今后更加活跃，故作此序。

相原茂

2003 年 11 月

(鲁晓琨 译)

目 录

第1章 绪 论	(1)
第1节 基本助动词范围确定与本书的研究目的	(1)
第2节 基本助动词语义研究的现状	(4)
1.2.1 助动词语义研究是汉语语义研究的薄弱环节	(4)
1.2.2 助动词语义研究中存在的问题	(6)
第3节 基本助动词语义研究的必要性	(9)
第4节 本书的研究方法	(14)
第5节 基本助动词的“情态表现”和“非情态表现”	(21)
1.5.1 既往研究	(21)
1.5.2 基本助动词的“情态表现”和“非情态表现”	(23)
1.5.3 助动词的作用域	(25)
第2章 “能”的语义和语义构成条件	(26)
第1节 “能”的既往研究和存在的问题	(26)
2.1.1 “能”的既往研究	(26)
2.1.2 “能”的既往研究存在的问题	(31)
第2节 “能”的语义	(35)
第3节 “能”的语义构成条件及“非情态表现”和“情态表现”	(39)
第4节 如何确定“能”的语义构成条件	(44)
第5节 如何确定“能”的“非情态表现”和“情态表现”	(46)

第 6 节 “能”的语义构成条件与语用效果	(49)
2.6.1 “能”的语义构成条件与请求表现	(50)
2.6.2 “能”的语义构成条件与许可表现	(52)
第 7 节 关于“能”的积极性语义特征问题	(53)
第 3 章 “可以”的语义及与“能”的语义语用对比	(59)
第 1 节 “可以”的既往研究成果和存在的问题	(59)
3.1.1 “可以”的既往研究	(59)
3.1.2 “可以”的既往研究成果和存在的问题	(63)
第 2 节 “可以”的语义	(65)
3.2.1 “可以 1”的语义及语义构成条件	(65)
3.2.2 “可以 2”的语义	(68)
3.2.3 “可以”语义的内在联系和区别	(72)
3.2.4 “可以”的“非情态表现”和“情态表现”	(73)
第 3 节 “能”与“可以”使用交叉范围的确定	(75)
3.3.1 从“可以”出发,确定“可以”与“能”的使用交叉范围	(76)
3.3.2 从“能”出发,确定“能”与“可以”的使用交叉范围	(78)
第 4 节 “能 n”与“可以 1”的语义共性特征	(79)
第 5 节 “能 n”与“可以 1”的语义区别特征	(80)
3.5.1 “能 n”强调 VP 的实现条件充分,“可以 1”强调 VP 的实现无妨碍	(80)
3.5.2 “能 n”具有积极性特征,“可以 1”具有消极性特征	(85)
第 6 节 “能 n”和“可以 1”的语义区别特征与语用 效果	(88)
第 7 节 “可以”的多义性决定一部分“能 n”不能换成 “可以”	(90)
第 4 章 “能”和“不能”的不对称现象解析	(92)
第 1 节 “能”与“不能”在语义上的不对称	(93)

第2节 “能 VC”与“不能 VC”的不对称	(97)
4.2.1 VC结构可能表现的不对称	(97)
4.2.2 “能 VC”与“不能 VC”在结构和意义上的不对称	(97)
第3节 表示“不可能”的“不能 1VC”的成立条件	(99)
4.3.1 “不能 1VC”替换“V 不 C”表示“不可能”的条件	(101)
4.3.1.1 “不能 1V 结”替换“V 不结”表示“不可能”的条件	(101)
4.3.1.2 “不能 1V 趋”替换“V 不趋”表示“不可能”的条件	(104)
4.3.1.3 “不能 1VC”替换“V 不 C”表示“不可能”的条件	(106)
4.3.1.4 “不能 1VC”和“V 不 C”的语用区别	(107)
4.3.2 只能用“不能 1VC”不能用“V 不 C”表示“不 可能”的条件	(108)
第4节 表示“禁止”的“不能 2VC”的成立条件	(110)
4.4.1 “不能 2V”成立与否跟“不能 2VC”成立与否的关系	(110)
4.4.2 VC内部结构特点跟“不能 2VC”成立与否的关系	(112)
4.4.2.1 “不能 2VC”中“不能”的否定作用点	(112)
4.4.2.2 VC内部结构特点决定“不能 2VC”成立与否	(112)
第5节 表示可能的“能”与“不能 1”在语用上的 不对称	(115)
第5章 “能”、“可以”与反问句	(118)
第1节 问题的提出	(118)
第2节 反问句的表意问题	(120)
第3节 “能”、“可以”与反问句	(124)
5.3.1 “能”在反问句中的意义	(124)
5.3.2 “可以”在反问句中的意义	(125)
5.3.3 “可以”与“能”在反问句中的意义区别	(126)
5.3.3.1 “可以 2”与“能”在反问句中的意义区别	(126)
5.3.3.2 “不可以”与“不能”在反问句中的意义区别	(128)

第 6 章 “会”的语义及与“能”的语义语用对比	(130)
第 1 节 “会”的既往研究成果和存在的问题	(130)
6.1.1 “会”的既往研究	(130)
6.1.2 “会”的既往研究成果和存在的问题	(134)
第 2 节 “会”的语义分析	(136)
6.2.1 “会 1”表示施事的本领	(137)
6.2.1.1 “会 1”表示施事具有某种本领	(138)
6.2.1.2 “会 1”表示施事的本领高	(141)
6.2.1.3 “会 1”表示本领高,“不会 1”表示“无本领”	(142)
6.2.2 “会 2”表示主观推测某种情况出现或存在的必然性	(144)
第 3 节 “能”与“会”使用交叉范围的确定	(148)
第 4 节 “会 1”与“能 n”的语义语用区别	(152)
6.4.1 “会 1”表示“施事具有某种本领”时,与 “能 n”在语用范围上的区别	(152)
6.4.2 “会 1”表示“施事的本领高”时,与“能 n” 在语义上的区别	(154)
第 5 节 “能 m”与“会 2”的语义共性特征	(155)
第 6 节 “能 m”与“会 2”的语义区别特征	(157)
6.6.1 “能 m”具有积极性特征,“会 2”具有中性特征	(158)
6.6.2 “能 m”的语义重心在前,“会 2”的语义重心在后	(160)
6.6.3 当 NP 能控制 VP 时,“能 m”推测主体已具备 条件,“会 2”推测主体的主观决定	(164)
第 7 章 “要”的语义及与“会 2”的语义语用对比	(171)
第 1 节 “要”的既往研究和存在的问题	(171)
第 2 节 “要”的虚化表现	(172)
第 3 节 “要”的义项划分	(175)
第 4 节 “要”的“非情态表现”和“情态表现”及内	

外部关联	(178)
7.4.1 “要”的不同义项之间的语义联系	(178)
7.4.2 “要”的“非情态表现”和“情态表现”及外部联系	(179)
第5节 “要”与“会2”的语义语用对比	(180)
7.5.1 “要”与“会2”使用交叉范围的确定	(180)
7.5.2 “要4”与“会2”的语义语用辨析	(183)
7.5.2.1 可以用“要4”的语义语用范围和条件	(183)
7.5.2.2 “要4”与“会2”的语用效果	(188)
第8章 “意愿类助动词”的语义语用对比	(191)
第1节 “想”与“要1”	(193)
8.1.1 从“想”和“要1”接受程度副词修饰上的 对立看二者的语义倾向	(193)
8.1.2 “想”与“要1”的语义区别特征	(194)
8.1.2.1 “想”区别于“要1”的语义特征	(194)
8.1.2.2 “要1”区别于“想”的语义特征	(196)
8.1.3 “想”与“要1”的语义共性特征以及与语义 区别特征的关系	(198)
8.1.4 由语义区别特征决定的“想”和“要1”的语用效果	(200)
第2节 “想”与“愿意”	(202)
8.2.1 “想”与“愿意”的语义共性特征和区别特征	(202)
8.2.2 “愿意”所要求的预设	(204)
8.2.3 由“想”和“愿意”的语义区别特征决定的 语用对立表现	(205)
8.2.4 “想”与“愿意”的使用替换及形成的原因	(207)
第3节 “愿意”与“肯”	(209)
8.3.1 “愿意”与“肯”的语义共性特征	(209)
8.3.2 “愿意”与“肯”的语义区别特征	(210)

8.3.3	能用“愿意”,不能用“肯”的语境考察	(211)
第4节	“想”、“要1”、“愿意”、“肯”的语义特征与 “家族相似性”	(215)
第9章	“必要类助动词”的语义及语义语用对比	(218)
第1节	必要类助动词的既往研究及存在的问题	(218)
9.1.1	以往对“应该”、“应当”、“该”、“应”、“得”、 “要”的语义概括	(218)
9.1.2	必要类助动词语义概括存在的问题	(221)
第2节	“应该”、“应当”、“该”、“应”的语义确定	(223)
9.2.1	“应该”、“应当”、“该”、“应”表示相同意义	(223)
9.2.2	“应该”、“应当”、“该”、“应”的语义	(224)
9.2.3	“应该类”与“情态表现”	(226)
第3节	“应该/应当”与“该”的语用区别	(226)
9.3.1	表示情理评价的“应该/应当1”与“该1”	(227)
9.3.2	表示根据情理推测的“应该/应当2”与“该2”	(229)
第4节	“得”的语义及与“应该类”的区别	(231)
9.4.1	“得”的语义与“情态表现”	(231)
9.4.2	“得1”与“应该类1”的语义区别	(233)
第5节	“要2”与“应该类1”、“得1”的语义对比	(236)
9.5.1	“要2”区别于“应该类1”、“得1”的意义	(236)
9.5.2	“要2”与“应该类1”的语义区别	(237)
9.5.3	“要2”与“得1”语义的相同点	(238)
第6节	表示现实需要的“得1”与“要2”的语用区别 ..	(239)
第7节	表示主观推测的“得2”与“要4”、“会2”的 对比	(242)
第8节	“应该类1”、“得1”、“要2”在“交往”中的语用 效果	(247)

9.8.1 在要求别人做事时,“应该 1”、“得 1”、“要 2” 可以达到相近的语用效果	(247)
9.8.2 在请求别人做事时,“应该 1”、“得 1”、“要 2” 表现出不同的语用效果	(248)
第 10 章 结 语	(250)
第 1 节 基本助动词的语义表达系统与认知心理	(250)
10.1.1 可能类助动词的语义表达系统与认知心理	(250)
10.1.2 意愿类助动词的语义表达系统与认知心理	(254)
10.1.3 必要类助动词的语义表达系统与认知心理	(255)
第 2 节 基本助动词的“非情态表现”和“情态表现”	(257)
10.2.1 基本助动词的“非情态表现”和“情态表现”小结	(257)
10.2.2 基本助动词“认识情态”表达系统	(258)
10.2.3 “认识情态”的确定性推测和不确定性推测	(260)
10.2.3.1 确定性推测和不确定性推测的区别	(260)
10.2.3.2 表示“认识情态”的助动词与语气副词	(262)
第 3 节 基本助动词内部肯否不对称现象的存在 条件	(265)
第 4 节 基本助动词语义语用辨析的有关问题	(267)
例句出处	(272)
参考文献	(273)
后记	(280)

第1章 绪 论

第1节 基本助动词范围确定与本书的研究目的

现代汉语助动词（以下简称“助动词”），又叫能愿动词。助动词是依据这类词的功能命名的，能愿动词是依据这类词的意义命名的。由于按照功能标准给词分类在汉语学界基本上取得了一致的认识，再加上这类词的意义比较复杂，用“能愿”并不能完全概括这类词的意义，所以本书采用“助动词”这一名称。近年来也有把“助动词”称为“情态动词”或“模态动词”的。名称问题，对本书的研究没有影响，假如汉语学界将来取消“助动词”的名称，把“助动词”都称为“情态动词”，那么本书就可以理解为“基本情态动词语义研究”。

助动词的数目究竟有多少，各家的分类标准不同，确定的范围也不一样，但是本书所研究的都是基本助动词。本书所要研究的基本助动词包括：“能（能够）、可以、会、要”；“想、要、愿意、肯”；“应该、应当、该、应、得（děi）、要”。我们认为这些助动词都是基本助动词，但并不是说基本助动词只有这些。我们在确定本书所要研究的基本助动词范围时，主要考虑两点：一点是“公认性”，另一点是“目的性”。所谓“公认性”就是已被多数语法学家认同。所谓“目的性”就是要符合本书的研究目的。关于“公认性”，主要是以丁声树等（1961）的《现代汉语语法讲话》，朱德熙（1981）的《语法讲义》，刘月华等（1983）